デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2026年（令和8年）10月28日（水曜日）（9）

ふみづくえ

8ミリフィルムを八戸へ

戴　周杰

「ホームムービーの日」をご存じだろうか。毎年10月の第3土曜日、世界100都市以上で開催されるこの催しでは、家庭に眠る8ミリフィルムを持ち寄り、上映を通して、その魅力を分かち合う。スクリーンに映し出されるのは、家族の日常のひとこまや地元の祭り、何げない街の風景など、そこに生きた人々の暮らしの記録だ。

日本では1960年代半ばから、8ミリフィルムが家庭でも手軽に撮影できるメディアとして、人々の暮らしに入り込んでいった。しかし、映像技術の進化とともに、かつて「わが家の出来事」を記録していた小さなフィルムは、いつしか物置の片隅にしまい込まれ、あるいはゴミとして捨てられていった。

そこには、テレビ局や新聞社が記録することのなかった、名もなき人々の暮らしが映し出されている。歴史に残る大きな出来事ではない日常の記録も、時の流れとともに貴重な歴史資料へと姿を変えていく。

記録のあり方は国や地域によって異なる。私の母国では、当時の政治的・経済的な事情もあり、8ミリフィルムカメラが一般家庭に普及することはなかった。

しかし、心の奥にしまわれた美しい思い出は、決してフィルムがなければ残せないというものではない。実家に残された古い家族写真。母が書いてくれた手紙。思春期の自分にとって宝物だった日記。誰かにとっては取るに足らないものでも、そこには人々の暮らしや、その時代の社会のありようが刻まれている。これらは、かけがえのないアーカイブになり得るのではないだろうか。

著作権保護のため
画像は表示できません

「午後のひととき」
中村しおん（十和田市）
＝第42回青森三紀グループ展＝

今年2月の旧正月は、コロナ禍以降、初めて故郷に帰り、家族と新年を過ごした機会となった。久しぶりに訪れた祖父母の家で、家族との日常をスマートフォンで動画に収めているうちに、私はこれまでも、自分ならではの「ホームムービー」をつくり続けてきたのだと、ふと気づいた。

私は両親の息子であり、祖父母の孫であり、いとこたちの兄でもある。そして昨年、新たに生まれためいの伯父となり、おいの叔父にもなった。家族の中での立場は、年月とともに少しずつ変わっていく。かつて両親に連れられて歩いていた私が、今では新しい命の成長を見守る立場になった。

ホームムービーとは、単に過去を記録し、懐かしむためのものではないのかもしれない。家族が共に過ごした時間を残し、世代を超えて記憶を受け渡していく営みでもある。今は何げない日常も、いつか誰かにとって、唯一無二の思い出になるのだ。

そんな思いを込めて、春節を終えて八戸に戻った翌月、地域の映画上映団体「白マドの灯」の協力を得ながら、「8ミリフィルムを八戸へ」を合言葉に、学生たちと共に初めての「ホームムービーの日 in 八戸」を開催した。

決して順風満帆ではなかった。それでも、皆さんと力を合わせて集めたフィルムを上映し、来場者から寄せられた感慨深い言葉に耳を傾けたとき、胸に込み上げるものがあった。地域の記憶をよみがえらせ、次の世代へとつないでいく。その営みに携われたことは、大きな喜びだった。

いつか年を重ねた私が、家族と撮りためた動画を見返す日が来るだろう。そこには、少し若い両親の姿や懐かしい祖父母の家、幼かっためいやおいの姿が映っているかもしれない。

そのとき私は、きっとほほ笑みながら、こうつぶやくのだろう。

「ああ、あの頃はこんなふうだったんだ。本当に懐かしいな」と。

（たい・しゅうき＝八戸工業大感性デザイン学部助教、中国湖南省出身、八戸市在住）

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。